學志館の授業指針(2014)

　學志館の塾としての存立理由は授業にあります。この授業をどのようなものとするかにより學志館の塾としての存在理由が明確になります。そのため、創立以来20年が経過した中で作り上げてきた學志館の授業をもう一度、全社員・全講師に共有し担ってもらうために明確な指針を今回、明らかにしていきたいと思います。

　各授業の目指すところ

　　生徒が塾に来て学習する動機は、各教科の学習において、もっと分りできるようになりたい、受験のため、学校の授業について行けなくなった等々、生徒により様々です。入口は様々でも受入れる授業では生徒を最短に且つ効果的に将来も見据えて学力を育む縁となることです。

　その目的のために、私たちはプロとして（プロとは生徒の保護者から月謝を頂き、仕事として生徒・保護者のニーズに応えること、常にMAXの状態に生徒の学習を進化させる条件になれること）生徒に関わり、生徒の学習状態をステップアップできるように先導していきます。その点において、生徒の学習状態の改善されたか否かの責任は担当する教師にあります。

　では、どのように生徒の学習状態を好転し改善することができるか？

それを、学習形態に分けて説明します。

クラス授業

　クラスとは1人でも複数人でも**暗黙知＊**を生徒の内側に築くことから始めます。塾だから勉強をさせればよいでは、本当に学習する力を持った生徒を育てることはできません。また、勉強だけに特化した対応では良き手本となるべき大人が将来を担う子どもたちに対し、何も示してはいないか、または、弛緩したなまぬるい、毅然とできない、頼りにならない大人像を示してしまうことになりかねません。

　授業への参加の仕方

１．理由も言わず平気で遅刻する生徒はいないか？

２．授業がはじまる前にマンガを読んだりゲームをして遊んでいる生徒はいないか？（年に1回池子校でクリスマス会を始めたきっかけは、いつも勉強ばかりをまじめにしに来ている生徒たちにクリスマスの時くらい塾に来ても一緒に遊んで楽しく時間を過させたいと思ったからです。生徒が塾に来て好き勝手に遊んでいたりする状態であれば、クリスマス会などやる意味はなくなります）

３．授業中に勝手におしゃべりをし、注意しても止めない生徒はいないか？

４．机や壁に落書をしたりする生徒はいないか？

５．宿題をいつも忘れ、小テストは毎回居残りの生徒はいないか？

６．池子校では靴を靴箱に入れない生徒はいないか？

７．授業中ガムを噛んでいる生徒はいないか？

８．机の上にうっぷしたり、腕枕をしていたり、カバンを通路に広げていたり、机の上に置いていたり、

 椅子にだらしなく座る生徒はいないか？　机の上にテキストを置いて記入せず、手に持って乱雑に記入

　 する生徒はいないか？

９．授業後、外で集まっていつまでもおしゃべりをしている生徒はいないか？

10．先生に対する言葉使いが乱暴になっていないか（ため口をきいてくる生徒はいないか）？

　友達感覚は乱暴に言えばNGです。親子でも友達感覚で〜というのもあるかもしれない。しかし、それは単に親が幼いだけではないか。同じことを先生と生徒の関係で言えば、先生が幼い場合はそうなるでしょう。その先生は生徒にとっては「友達」以上にはなれないと言うことです。

　上記の状態が普通の場合、塾としての教育の質は低い状態です。生徒がいくら集っても、先に挙げた塾としての存立理由に関わる問題です。問題点は、勉強しているんだからいいではないか、テストでいい点取ればいいじゃないか。刹那主義。今さえ良ければ「後は野となれ山となれ」勉強の仕方、姿勢がその生徒の今後の生き方の鋳型の一つになるとしたら、「今さえ良ければ〜」的な無責任な態度は教師として取れないはずです。

　授業本来の姿

１．生徒が遅刻したとき、「遅刻してすみません、〜で遅れました」と自分から言える。

２．授業前にはテキストを開き小テストの準備などをしている。または準備を完璧にしてきて元気に会話

　が弾んでいる。

３．授業中、先生の言うことに集中し、学習に取組んでいる。

４．授業が終ったら机の上の消しゴムのカスや周りのゴミがあれば拾ってきれいにして退出する。

５．宿題を忘れることは滅多になく（生徒もまだ子どもなのでたまにする場所を間違えたり、場合には忘

　れたりすることもあるが、それを通して生徒の状態を聞くこともできる）、小テストもほとんどの生徒は

　1回合格。ときどき、再テもあるが、再テも1回で合格する。

６．靴は靴箱に全員が毎回言われなくともきちんと入れてある。

７．生徒が負荷の多い授業で長い時間、一生懸命に勉強しているので、頭をリセットするためにアメをあ

　げたりするときもある。

８．座る姿勢は良く、前をしっかり向いて先生の説明に耳を傾けている。荷物は邪魔にならないところに

　きちんと置いてある。こういう姿勢の問題は生徒の習慣の問題であり、クラス授業のルールの問題になる。だから最初の頃に見逃して何も注意せずに、しても効果ないとあきらめた場合、その生徒の習慣は変わらず、または強められる。生徒の姿勢に関して、もし3人の先生が授業で関わり、生徒の姿勢について授業中に2人の先生が注意しても、もう1人の先生が見過ごしていたら、その生徒の習慣を変えることが一層困難になる。その生徒に関わる全員の先生が同じ意識・同じ基準で生徒に対していたら、その困難な生徒の習慣は改善されやすくなるでしょう。

　こういう前提の上で授業のできる環境ができると、生徒は勉強を言わなくてもするようになり、成績もぐんぐん伸び、受験で失敗する生徒は出ない。

　現在、學志館は2校体制（6年目）となり、新しい先生や講師の人数も増えてきた。ここでもう一度、原点に立戻り自分たちは何を目指しているのかをしっかりと共有し共同していきたい。この共有と共同ができなければ本来の授業は學志館全体として成立せず、質の低い教育を行う塾となってしまう。質の高い教育とは受験レベルの高い、つまりトップ校に何人合格させたか？で決まるわけではない。普通の生徒が自分だけではできないレベルの勉強ができるようになり、気持ちも学習姿勢も落ち着いてきた状態の生徒をどれだけ生み出せるか、どれだけの率でそういう生徒が通う塾となっているかによって決まると思う。

　では、その暗黙知とはなにか？

 **• ナビゲート ビジネス基本用語集**の解説

 暗黙知とは経験や勘に基づく知識のことで、個人はこれを言葉にされていない状態でもっている。経営学者の野中郁次郎は、日本企業の研究において暗黙知をこのように定義し、形式知の対概念として用いた。例えば、個人の技術やノウハウ、ものの見方や洞察が暗黙知に当てはまる。日本企業では、個々の社員の暗黙知を形式知化し、組織で共有することによって知識を創造すると野中は主張した。 暗黙知の概念は、もともとハンガリーの科学哲学者マイケル・ポラニーが提唱した。彼によれば、人はつねに言葉にできることよりも多くを知ることができる。個人がもつ知識には、言葉で表現できる部分と、言葉で表現できない部分とがあり、前者よりも後者のほうが多くを占めている。ポラニーはこの後者を暗黙知とよんだ。つまり、野中が「まだ言葉にされていない知識」を暗黙知と考えるのに対し、ポラニーは「言葉にすることができない知識」を暗黙知と考えた。